

## 「寛」という字あれこれ

年頭の記者会見で、「新年の抱負を漢字一文字で表すと何ですか」という質問を受け、「寛」という文字を色紙に書いて提示させていただきました。地方創生や創造都市づくりを推進するに当たって、開放性や多様性を大切にしまちづくりを行う必要があります、そのためには常に寛容の精神が求められるとの思いからです。

私が、創造都市推進をまちづくりのテーマとして掲げるきっかけの一つとなった「クリエイティブ都市論」という本の中で、著者のリチャード・フロリダは、「寛容でない場所は決して発展しえない。加えて、寛容でない地域の住民は、寛容で開放的な地域の住民よりも幸福感や満足感が低いのである。」と述べています。都市や地域コミュニティにおいても、多様性（ダイバーシティ）を認める寛容性が確保されていることが発展のために必要な条件であると指摘しています。

「寛」という字の成り立ちは、「祖先を祭る廟（みたまや）の中で、眉を太く大きく描いた巫女がお祈りしている形」から来ており、「ゆるやか」や「ゆたか、ひろい」の意味となるそうです（注）。名前に使われることも多く、すぐ思いつくところでは、菊池寛の「寛」であり、良寛さんの「寛」です。

菊池寛は言うまでもなく、郷土高松が生んだ偉大な小説家であり、雑誌「文藝春秋」を創刊し、芥川賞、直木賞などを創設、「文壇の大御所」と呼ばれた実業家でもあります。名は体を表すで、その生涯を通じた様々なエピソードを見ても人間的におおらかで、広（寛）い心を持った人物であったことが伺えます。

また、良寛は江戸時代後期の僧侶で、生涯無一物を貫き、子どもと無邪気に遊ぶ姿が象徴的に伝えられる清貧で無欲の人です。一方で優れた歌人、漢詩人であり、書家でもありました。様々な顔を持つ器の大きな人だったことが想像できます。特に独特の書文字は、「弱さに強さがある」と評される比類のない美しさがあり、その心の広（寛）さを感じます。

「この里に 手まりつきつつ 子どもらと 遊ぶ春日は 暮れずともよし」

この良寛の詩に象徴されるような寛大さと優しさを少しでも見習い、心がけてまいりたいと思います。

（注）「常用字解」白川静 平凡社参照